

横川四十八著

「偉人タルカッタ女史」再録

若 山 晴 子

『一粒の麥地に落ちて死なずば多くの果を結ぶ事能はず』

六拾年の昔、米國婦人傳道會社より派遣せられたるミス・タルカットが日本女子教育の爲に神戸の地に吾學院の基礎をすえられ、一粒の麥として死なれた。その麥より多くの果結び、同窓二千、在校生八百の現在の隆盛に至らしめたこの偉大なる功績を思ふ時、吾々は只感謝をのみ捧ぐべきではない。更に新しき一粒の麥として、學院の尙一層の發展に協力せねばならぬ。

このめでたき六拾周年に當りその記念號「ゆふはな」第五號を發刊し、喜びと感謝にあふれつつある諸姉に捧ぐ。

右は、神戸女学院文芸会が昭和十年（一九三五）に發行した「ゆふはな」第五号の卷頭言である。口絵頁にタルカット女史の写真を掲げたこの雑誌は、座古愛子姉の「思ひ出の一二」を筆頭に、「タルカット女史年譜」と、学院初代図書館長横川四十八教授による「偉人タルカット女史」とをもつて、学院の創立者をしのび、以下の多彩な寄稿の先導となしている。けれども、この「ゆふはな」なる文芸誌については、『神戸女学院百年史 各論』第三部の「神戸

女学院と近代詩歌」中に言及があるので、本稿では敢えて触れない。ここでとり上げたいのは、先述の第五号の第三の記事、横川教授の筆になるタルカット伝である。

タルカット女史 (Eliza Talcott) は本学院の創立者として周知であるのみか、七五年の生涯のほぼ半分を日本人伝道のために捧げ日本の土となったことにより、その葬儀の際に他派の牧師をして「デイヴィス博士とタルカット女史とは、単に組合教会のと言わず、日本のキリスト教会(全体)の人であった」と言わしめた (Mission News, 1911, Dec., p. 47) ほどの人物であったから、その生涯について語られたことも皆無ではなかった。しかし何故かそのいずれもが完結した伝記となっていない。しかも時には、書き手ひとりよがりの推断や歪曲もなしとは言えなかった。それらの中にあって、殊に日本人の書いたものとして、このタルカット伝は注目に価するものと思われる。それはこの著者が、当時日本に在って手にし得た史料としてはおそらく最も良いものを、渉獵し、利用したと思われるからである。

もっとも実際に記述の細部にあたれば、今日我々が最近の史料操作によって訂正し補い得るに至ったいくつかの事柄を別として、なおいくつかの誤り(史料の読み誤り、書き誤り、勘違い等による)を指摘することができる。それ故本稿では、まずこのタルカット伝を再録し、次いで後段に「註解」の部を配して、許されるかぎりの検討と補足とを試みることにした。とはいえこの試みも、さらに後日の修正を期してのものではあるが……。

このタルカット伝の執筆者横川四十八教授は明治二年一月二十八日生まれ、福井県人で、明治二十五年(一八九二)より三十二年(一八九九)まで福井県内で教職に携わり、以後、愛媛、山口、宮城各県の師範学校、高等女学校に奉職、明治四十年(一九〇七)九月神戸女学院に來任——という経歴の持ち主である。神戸女学院はこの前年より学科組織の改正に着手しており、一九〇九年には四年制専門部の設立認可を得るに至る。のちに初代図書館長となる真摯博識の学究の着任は学院にとって時宜を得たものであったとわかる。そして横川教授は、タルカット女史の生涯の最後の四年

間を身近に知る機会を得、なおその葬儀においては学院を代表して棺を昇くことになった。

横川教授の履歴にはなお、一九一六年夏からの米国留学がつけ加わり、クラーク大学における一年間の研鑽の結果、*The Education of Japanese Women*と題する論文によってMAの学位を取得したとの記録があるが、神戸女学院における横川教授について『神戸女学院百年史 総説』は「本来心理学専攻ながら独学力行して多方面に才能を発揮し、殊に図書館を主宰した」と述べ（一九九頁）、その図書館に対する貢献の程を紹介している（一九一頁）。実際横川教授の担当科目は広範にわたり、一九一五年に専門部を卒業した實生すぎ姉は、「倫理、論理、教育、哲學、經濟學、心理學等」を学んだと述懐する（「めぐみ」三八号—本稿「附録」参照）。「基督教世界」「兵庫教育」「教育」等への寄稿も多数である。しかしながらその業績の最たるものは、本学院図書館組織の確立と爾後の運営とであった。横川教授は初代図書館長として、定年後の余生をもこれに捧げ、一九四一年九月三日、在職のまま永眠した。

このタルカット伝の原文が旧漢字旧仮名遣いによっているのは当然のことながら、これはまた、仮名書きの部分に平仮名を用いることなく、欧文固有名詞には傍線を附して地の文と区別するという様式を採って、独特の雰囲気醸している。これは現時点においては珍らしく、味わい深いものとも見えるが、その一方、不慣れなるが故に読みづらいつとの声もあった。そこで、このたびの再録にあたっては、漢字仮名遣いについては仮名のおどり字を書き改めたほかは全く原文のまま転写するが、外国の地名、人名、その他の固有名詞および外来語以外の片仮名を全て平仮名に改め、上述の語に附された傍線ははずし、外国人名の名と姓とをつなぐ記号を「・」から「・」に変える—という方針をとった。行間の（ ）内の書き込みは若山のメモである。もとより本稿と原典との間には、書物のサイズ、字配り（「ゆふはな」は菊判変型、一頁当たりの配字は四二字×一九行である。—口絵第一頁参照。）の上で差異があり、今またこのように手を加えたことにより、版面の印象はかなり変えられることになろうが、この点は、史料の発掘紹介を旨とした本

誌の性質上、御諒承いただけることと思う。

註解と補足とのために用いた史料は、本誌前号の「イライザ・タルカッタ女史略年譜」に掲げたものと同様である。(なお、この「略年譜」の参考文献の項に「ゆふはな」第五号を大正十年の発行と誤記したことをおわび申し上げます。) 横川教授の著述の主たる典拠は、*Mission News of the A. B. C. F. M. in Japan* のタルカッタ女史追悼号、小西すま著「創立五十年 神戸女學院史 明治八年—大正十四年」、またデフォレスト女史の史料集(本誌前号、四〇—一二頁参照。)の中の数篇(特にローラ・ラーネドのタルカッタ伝)であつた。

偉人タルカッタ女史

横 川 四 十 八

『血統と家庭』^① 神戸女學院の創立者は、英雄と呼ばれ、日本のナイチンゲイルと稱へられ、クララ・バートンに比べられたエライザ・タルカッタ女史(Miss Eliza Talcott)である。女史の祖先は一千六百三十二年遙に大西洋を横斷して來航したるジョン・タルカッタと稱したるらしき人にして、有名なるトオマス・フツカアのささやかなる一隊に参加してケムブリヂから人跡未到の地を勇敢に踏破して遂にコンネチカッタ川の流域に達しここにハートフォード市を創

設したる先驅者の一人である。女史が後年日本傳道に於て婦人の身を以て單身深夜數里の寂しき田舎道を平氣で往復せられ、甚だしきは白刃の下にも從容として迫らず、平素の寛容、柔和の態度を失はれざりし非凡の勇氣は透徹せる其信仰に依るならんも亦之を其祖先の血に受けられたるところあるは否むべからざる事實である。善人と稱へらるるパアン・フツカアは女史の母系の祖先である。ジョジ・タルカットなる女史の從兄弟に當る一老人が昭和二年の九月までヴァノン南部のタルカット・ヴィルに生存せられたのである。

タルカット家は世々ヴァノン (Vernon Ct.) に住し、祖父も曾祖父も共に其教會の執事を勤めて居り、父のラルフは正義其物と思はれた程の人であつたから、「唯品性のみが尊まる」(Virtus sola nobilitat) との家憲は信仰と徳とに於て女史に依りて極めて能く代表せられて居るのである。

ラルフ・タルカットは夫人スウザン・ブルとの間に四人の娘を與へられた。女史は實に其第二女にして一千八百三十六年五月廿二日呱呱の聲をあげられた。父のラルフはロックヴィルと稱するヴァノン北部の繁華な土地に毛織工場を有して餘程有福に暮し、人格、名望共に地方人士の仰いで尊敬するところであつた。

タルカット家は斯く信仰篤く資産ある家庭であつたから牧師、宣教師の人々を能く歡待したばかりでなく、母の會が何時もここで開かれ幼き女史等も集會が兒童に適する場合には出席せしめられたのである。女史等は早くより教會に出席し且其活動に参加せられた。かく女史は美しい基督教的家庭内に其姉妹と共に生長せらるる中一千八百四十七年父のラルフは永眠せられた。

『教育と教師生活』^① 其頃ファミングトンに一つの女學校が設立せられタルカット女史はここに入學せしめられた。

このファミングトンは其處の牧師の書齋で^(に於いて)アメリカで最大なる外國傳道會社の創立の協議會が開かれたといふ外國傳道史上由緒の深い町である。彼のエエル大學の偉大な總長のノア・ポオタアは此牧師の子にしてタルカット女史の入

學せられた女學校は總長の令妹セイラ・ポオタア氏が僅に廿歳の時に創立せられたのである。

ポオタア女學校在學中タルカット女史の成績は餘程優良であつたと見え、學校から留まつて其助教たらんことを乞はれた程である。

母君の不慮の永眠に依り、女史はポオタア氏との密接な關係は破れたが在學中のポオタア氏の感化に依り教師の職に従事せんと志望を生じニュウブリテン州立師範學校に入學せられ、一千八百五十七年卒業、直にフアミングトンの女學校に歸り、ポオタア氏を助けて二年間女子教育に従事せられた。後四年間ニュウブリテンの公立學校に教鞭を執られた。爾後八年又は十年の間はブレマウスにある叔父ウィリアム・ブル(William Bull)の家にありて病身な伯母の看護に一身を捧げて居られたやうである④。

『外國傳道の決意』^{(註)①}

ウィリアム・ブルの家は代表的な新英州の農家である。ここに女史は八年又は十年隠れた靜かな生活を過されて居る間に女史の外國傳道の精神が其種を蒔かれ、水注がれ、育てられたやうである。其本質的な因ともいふべきは祖先から受けられた清教徒的遺傳の傾向と、敬虔なる家庭の宗教教育とに基くものであつたであらうが、決心の縁ともいふべきはブレマウスに於ける經驗であつたと考へられる。其第一は祖母なる老ブル夫人の傳道に對する熱心である。タルカット女史の決心は之が感化に依るのである。第二はウィリアムの弟アイザック・ブルの與へた東洋に關する興味である。アイザックは富有なる商人にして盛に支那貿易に従事し且彼自ら支那に渡航せることもあり、彼の客間は所狭きまで支那を始め其他東洋諸國の珍貴な品で飾られてあつたのである。かくて彼は其姪らは云ふも更、誰にでも東洋事情を語り聞かせて強く興味を唆つたのである。第三には一千八百七十二年の頃トルコ傳道の一宣教師ブレマウスに來りて東洋傳道の爲宣教師の蹶起せんことを訴へたことである。其時タルカット女史は其友人の一人を適任者として推薦したるに對し彼の宣教師は何故貴賤自ら決心せられないのです……では彼地で再び

お目にかかりませう、といつて去つたことである。これは女史に最後の決意を促した動機と推定せられる。^②

『タルカット女史の日本來朝』タルカット女史が傳道者たるに必要な精神的準備も、六年間の教員生活十年間の病人看護の努力等共に日本に於ける女史の事業と活動とを豫言せるものの如く、時は満ち、期は熟したのである。宛もよしアメリカン・ボオドは日本の新傳道地に婦人に對する宣教師として若き二人の婦人候補者を求めて居たからタルカット女史は其候補者たらんことを出願した。然るに女史の態度が餘りに謙讓であつたのと、年齢已に卅七に達し困難なる東洋の言語を學習するには更に年若き婦人を派遣することが尤適當なりとの意見もあり、幹事トリイト (Treat) 氏は女史の任命を躊躇する模様であつたが此事が幸にしてブレマウスの牧師イイ・ビー・ヒルラアド (B. B. Hillard) 氏の傳聞するところとなり、氏は直に書をトリイト氏に寄せてタルカット女史の人物につき説明するところありて、女史の眞價が明瞭となり、問題は直に解決したのである。後日其結果の示す如く女史の人格手腕、日本語の精確流暢共に神は其召し給ふところの者を知り給ふことは明瞭である。東部よりはタルカット女史、中央西部よりはジュリア・ダッドレイ女史共にアメリカン・ボオド最初の婦人宣教師として一千八百七十三年 (明治六年) 歡喜、勇躍して日本に向つて出發した。

ダッドレイ女史は一千八百四十年十二月五日、シカゴに近きナポルヴィルに生れロツクフォード・セミナリイに學び卒業後數年間教職にあり、傍病身な母の看護に努めたが母の永眠後日本傳道の決意をしたのである。この二人の婦人——タルカット、ダッドレイ——は經歷に似通ふところがあり、且其性格互に相和し、相補ひ、協同して活動するに最善最適であつたことは人には後年に至りて認識せられたのであるが神は豫め知り給ふたのである。併も此二人は全く互に相知らなかつたがサンフランシスコの埠頭に於て初めて相知り、共同の目的と關心とが互に理解されると間もなく親友となつてしまつた。^③タルカット女史は東部婦人傳道會社より派遣せられ、其殆四十年間の奉仕は同社スプリングフ

イルド支部の支持するところであつた。

ダッドレイ女史は中部婦人傳道會社より派遣せられたのであつた。兩社ともアメリカンボオドに屬する組合派の傳道會社である。

廿七日間の航海の後明治六年三月三十日タルカット、ダッドレイの兩氏は翠巒滴るが如き神戸に入港しグリーン、デビス兩家の人々に迎へられて其憧憬の傳道地に上陸した。^①

當時日本に於ては明治四年に廢刀の命が下つたが武士たちは尙多く腰間に秋水を帶びて睥睨闊歩せるの時であつて天上の友の記者が神戸には「未だ信徒あらず、教會あらず、先に赴任した宣教師數人も唯日本語を學び、青年に英語を教へ傍ら道を談るに過ぎず。切支丹邪宗門法度の嚴令尙効力を存して一般民衆の基督教を恐るること甚だしく傳道の困難いふべからず。女史素より屈せず、熱誠能く人を動かし漸く親しむ者あり。遂に幾多の篤信なる婦人を起すに至りぬ。神戸教會の創立せらるるや女史衆人の背後に隠れて能く働き當時教會の旺盛なる元氣は女史の誘導に依れるもの多かりき」と書いて居るのは當時の日本の事情と女史の活動とを巧に描寫して居る。

『神戸女學院の創立』^① 基督教は嫌ひだが英語は習ひたい。これは上下を通じての當時の日本青年男女の心理であつたから先着の宣教師の例にならつてタルカット女史も渡來の年の秋前田泰一氏の父兵藏氏の花隈村の家の二階を借りて毎日午後二時間づつ附近の子供を集めて英語を教へることを始めた。^②

兩女史には日本語を覺えることが差當つての急務であつた。タルカット女史は語學の才能があつたが禮儀を重んずる日本人中には往々其誤謬を無遠慮に訂正する教師を得るのに苦心したといふことである。女史は能く日本語の用語の複雑なる區別を理解し何人にも最も適當なる言語を使用することに成功した。さて、集つて來た兒童にABCから始めて英語の初歩や英讀美歌―其時教へられたのは I love to tell the Story で今の五百十七番いともかしこしイエス

の恩恵である^①。を教へる傍舊約の物語を話した。それは成功であつて生徒の數が増加して八才から卅才までの男女十八名になつた。しかも其の中の五人は既婚者であつた。生徒の數も増し學力も漸次進歩してキリスト傳を教へ、世界地理を教ふるに至つた。花隈村の前田氏の二階は遂に狹隘を感じるに至り、明治七年の四月白洲氏の北長狹の持家に轉じたが忽ち其處も狭くなり^②。遂に愈々學校建築の必要に迫られ、内外人の協同盡力の結果、彼の山本通の舊校舎の南舎と稱せらるるのが出來てここに明治八年十月十二日神戸英和女學校が開校せられた^③。

タルカット、ダッドレイ兩氏の喜びと感謝とは思半ばに過ぐるものがある。當時の社會狀態よりして考ふれば其頃の神戸英和女學校に入學せる人々は第一其家庭が最も優れた進歩主義であらねばならぬのみならず生徒其人も親類縁者の反對や口善惡なき近隣の人々の嘲笑に堪ふるの勇氣がなくてはならぬ。彼等は孰れの方面からも拔群の青年女子であつたに相違ない。寄宿生は五人あつた。甲賀ふじ、清家ふみ、濱口のぶ、村田^④きよの諸氏である。就中甲賀姉は兩女史の股肱であり、年長であつたので舎監の役をした。通學生も十數名あり白洲、河本、前田氏等の男子、市田久子、北村氏、九鬼よし子^⑤（松方幸次郎夫人）、小寺秀子、白洲こまの諸氏があつた^⑥。

校長^⑦カルカット女史の日本女子教育の理想は基督魂を持った日本風の婦人であつたから若し生徒達が輕薄な西洋かぶれになることがあれば甚しく之を嫌ひ嚴格に匡正した^⑧。だから禮儀作法中は矢釜しく、お辭儀など幾度もやり直しさせられたが只姿勢だけは日本の古い習慣を打破して常に眞直にと注意したといふことである。

明治四十一年、二年の頃筆者が女史より親しく聞けるところにては英和女學校當時數人の男女日本の友人が女史に對して「あなたの學校の生徒は足を内輪にせず、からだを眞直にしてまるで男の様な歩き方をしますから御注意します」と親切に注意して呉れたが^⑨今は女學院だけでなく、大抵な女學生は姿勢を正しくして歩きます。日本の女子教育は大に進歩して嬉しいですと繰返し話されたことがある。女史は亦生徒一人々々の長所に注目して銳意個性の充分な

發展に努力せられた。一生徒が音樂の才能あるを認めたる時の如き再三其家庭を訪問して別に校外の教師につきてオルガンを稽古させた。之を要するに校長として、教師としてのタルカット女史は非常に親切であつたが嚴格で、行届いて世話をせられたから、男性的で嚴格其物のやうな感を生徒に與へたのである。

然るにダッドレイ女史は物柔かで全く母親の型であつた。タルカット女史の父らしき感化はダッドレイ女史の母らしき感化と相待つて當時生徒數の少き學校生活を眞に家庭的な情の濃やかな理想的な校風を基礎付けたのである。

生徒であつて舍監の役目をした甲賀ふじ女史も英和女學校の訓育に重大な關係がある。甲賀女史はタルカット女史の嚴格とダッドレイ女史の寛大とを兼ね具へて綿密に行届いて親切であつた。休暇で歸省するときなど生徒一人一人の荷物の始末まで自らしてやつたから、甲賀氏が居なくなつた時生徒達は氏がどれほど親切な人であつたかを悟つたといふことである。吾人は神がタルカット、ダッドレイ、甲賀の三人を選んで今日の此神戸女學院の精神的基礎工事に協力せしめられた深き攝理と恩恵に感謝しなくてはならぬ。

明治九年にはバロス女史 (Martha Barrows) 渡來して兩女史に加はり、十二年には更にクラアクソン女史 (Clarkson) 渡來して専ら學校の主任となつて事務を執り教授をもせらるるやうになつた。

タルカット女史は神戸英和女學校は新來有爲の教師に譲り、自分は神の命じ給ふまま隨所に傳道して、苦しめる者、悩める者、弱きものを助けて其母となつて努力するのが使命であると感じ、明治十三年岡山に招かれたるを機會に其處を根據として地方傳道をなさんが爲めに、ダッドレイ、バロスの兩氏は神戸を中心として三田等に傳道する目的を以て明治十三年三女史共に辭された。^⑩

當時の學校が生徒募集の爲めにした廣告は如何にも興味あるものであるから明治九年八月十九日 (金曜) の七一雜報 (基督教世界の前身) から轉載する。^⑪

廣 告

神戸山下通の女學校避暑休業致しましたが来る九月十一日より開校ます國史漢籍を教へるために學務に習慣たる日本教員を得たり。

午前は國史漢籍

午後は英語 西洋の諸科の學は生徒の力らに應て授べし

毎日聖書を教生徒の品行を堅守らすべし入塾生徒は傳輔に導かれざれば妄りに學校の地面を出を許さず入塾志願の人は等級を定る開校の期に來らんを要す

但し此時に後れたるとも閉るには非ず

入塾生徒の月謝月棒 金 貳 圓

書籍及蒲團等は生徒自ら辨ふべし

通學生徒の月謝 金七拾五錢

學科及規則詳に知たくば執事に質すべし或は從前出せし廣告書を視るべし

千八百七十六年八月

右 女 學 院

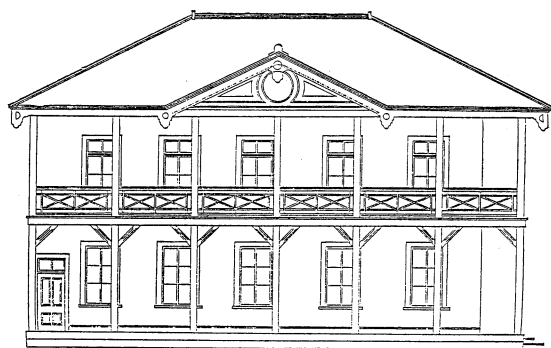
タルカッ
ダツレ 1

これに依りて明治九年頃の民度と文體用語の變化が明に認識せられ亦當時女史を助けた執事若くは書記の練達の士

神戶訪問山女學校



(明治八年当時の校舎)



(明治九年増築の校舎)

であつたことが理解せられる。筆者は讀者の注意を喚起したきことが二つある。其一は當時の女學院が國史、國語、漢文を尊重したことである。即ち午前中を全く國漢文に充て午後を英語及び他の學科に充てたことである。ここにタルカット女史の床しさがある。亦入學期を過ぎても「閉るに非ず」としたることは當時志願者の少數なりしにも依るなるも如何にもタルカット女史らしく、求むる者には決して拒ばない精神が窺はれる。(七一雜報第二卷第十五號、第十六號)斯くて明治十年四月の頃生徒數四十餘名に達し彼の所謂南舎にては狹隘を感じ入塾を志望するもの益多きに依り、日本人のみの據金にて經費三百七十五圓を投じて左圖の如き新校舎を増築した。

開校僅に一年有半なるのみにして校舎の増築を見るに至つたのは當時歐化主義の漸く盛なりしにも依るなるべきも女史等の熱誠と聖愛とが社會の認むるところとなり。舊三田藩主九鬼男爵等多數有力者の關心と好意とを惹起したるに依ることは否むべからざる事實である。

『中國活動』 是より先岡山に於けるミス・ジュリア・ウイルソン (Miss Julia Wilson) が健康の必要上來朝後數月にして歸國したるを以て岡山は本國ボオドに對しウイルソン氏の代理として臨時にタルカット女史を來任せしめられんことを請求して容れられ、女史の岡山轉任が實現するに至つたのである。女史の英和女學校を去ることが如何に情に於て忍びざるものがあつたかは女史の送別會と覺しき學校に於ける最後の集會に關する女史自身の記事で察することが出来る。女史は如何に其熱愛する教育事業の今や盛に延びて行くのを見棄てて傳道旅行に出かけるのは胸の迫りて堪へ難き思ひあるも生徒等が涙を抑へ祈禱の聲の沈み勝なるを聞きては堪へ難き思ひをなし強ひて己を忘れ努めて快活に會衆の氣分を引立つるやうな話をしたといふことである。併し女史は「困つて居るところに行つて助ける」といふ仕事は其最も好むところであつて、常に「私は出て行かなければならぬ事情がなければ一つ所に止まつて居るが、元來根が附いたところから引抜かれ、屢々植更へられるのが私の運命であるらしい」と曰れたといふことである。① 到るところの活動振りは堅忍、不拔、克己勵精、文字通りの寢食を忘れての戰闘であるから何時でも勝利を得て居る。岡山でもベリイ氏の家を根城として全力を盡して個人傳道をなし、岡山、鳥取、廣島の三縣に涉りて愛の奮闘をなし、其感化を受けたるもの數百名に及び多くは悔改めて信者となつたのみならず、有力なる傳道者となりたる者さへ少からずあるのである。就中岡山孤兒院の父である石井十次氏の如き、小説的な生涯を送りたる後有力なる婦人傳道師となりたる炭谷小梅氏の如きは常にタルカット女史を母と呼んで居たのである。又當時岡山の有力者であつた中川氏の如きは其助力に依りて岡山傳道が開始されたといつても宜しいのである。後に山陰道の盲人傳道者として有名に

なつた丸毛氏、倉敷の林源十郎氏及木村氏等の一家、辨護士會長の石黒氏等いづれも女史の感化に依りて信仰の道に入りたるものである。女史の活動は廣く社會階級の各層に及んで居る、即ち岡山の舊藩主及び皇后陛下の從姉妹にあらせられる其夫人が女史の感化を受けて居るばかりでなく多くの水平社の人々も女史を通じてキリストの恩寵に浴して居る。女史は到るところ成功ならざるはなく實に目覺しい活動であつた。

明治廿二年の冬タルカット女史はミス・マクレナンと相携へて鳥取に至り多くの困難障害と戦つて裏日本の傳道を開始して中國ミツシヨンの鳥取支部を設くるに至つた。是亦女史の功績の著しきものである。

『日清戦争とタルカット女史』 日清戦争に於けるタルカット女史の活動と其結果につきミス・エヌ・ビー・ゲエンスの材料に依りペティ氏の記するとノルスロップ氏、ジョン・エイ・コックリル氏の記するところは皆能く一致するところあり、何人も眞にナイチンゲイルやクララ・バアトンを聯想せしめる貴重なる事實である。今以上の資料に依り其大略を記すこととする。

明治廿七、八年日清戦争の頃の廣島は日本に於ける最も樞要なる土地であつた。其所より軍隊はすべて輸送せられ、大部隊の駐屯地となり、日清兩軍の病傷兵と捕虜とは盡くここに送致せられた。僅々六週間にして優に傷病兵四千名を收容し得べき設備の完備した病院が建設せられた。タルカット女史は明治廿七年の十一月の急激に人口が數倍になつて沸騰するやうな騒ぎの廣島に來たのである。女史の最初の目的は甲賀氏と共に九州行の途次單に數日滞在する積りであつたのである。廣島女學校の校長ゲインズ氏は之を知りて特に女史の爲めに一室を用意し廣島滞在中は幾日にも校内に宿泊せらるるやうにと案内したのである。然れども女史は日本人との交際の便宜の爲め甲賀氏と共に日本人の家に行かれたが一日を経てゲインズ氏に書信して「御案内の御都合が今でも宜しければベツトとストオヴとの便宜を得たいから日曜を貴家で過ぎして下さい」と申越された。蓋し當時交通の不便なる鳥取、廣島間をタルカット女

史は人力車で通して乗り越えられたる爲め非常に疲勞し、殆んど病人になつて居られたのである。其日より約一年間廣島に於ける女史は其事業の終る迄廣島女學校内のゲインズ氏の宅に滞在したのである。

タルカット女史の活動の手初めは先づ廣島女學校附屬幼稚園兒童の家庭訪問であつた。其間に相互に親交を生じ、其家庭の庭園から呈供せられた花を出征の日を待つて市内に彷徨して居る兵士たちに與へて彼等を慰め勵し、漸次道を傳へることから手蔓を掴まれたものらしきも自分の事を談られぬから宿をして居たゲインズ氏にも詳細は明らぬが餘程反復懇請努力せられた結果遂に野戰病院に自由に出入せらるるやうになり、其崇高なる人格が醫官はいふに及ばず日清兩國傷病兵の愛敬の的となつた。ここに譲つて女史が廣島に來らるる前教師として亦實地看護の指導者として努力せられた、同志社看護婦學校につき一言しなくてはならぬ。岡山にてタルカット女史が其邸に居住せられたジーン・シー・ベリイ氏(John C. Berry)は明治初年の内務郷故大久保利通郷の知遇を得て日本監獄改良に偉功を奏し、且明治廿五年十月尾濃の大震災に急遽京都より其主宰する同志社看護婦學校の生徒を卒ひて天幕、藥品等一切を運びて罹災者の救護に當るなど、其他當時の幼稚な日本醫學界を指導するなど我國の社會事業には陰に陽にいひ知れぬ功績のあつた宣教師兼務の醫師であつて現に米國マサチューセツト州ウースター市に八十八歳の高齡を以て靜に餘生を樂んで居らるる日本人の忘れてならぬ偉大な人格者である。ベリイ氏の看護婦學校を建てたのは明治十九年の十月上旬デビス氏(Dr. Davis)の住宅の一棟を假校舎に充て新入生を收容したのに初まり、やがて新築工事落成して廿年の八月三日に府知事北垣國道等臨場して盛大な開院式兼開校式が舉行せられた。明治廿四年女史は岡山より京都に來り看護婦學校の教授として舍監として實地看護の指導者として活躍せられたが廣島へは鳥取を経て中國山脈を横斷して來られたのである。女史は官憲が特別の詮議を以て廣島の野戰病院に出入するを許すに至るや、多くの婦人のなすが如く單に花弁(ハナヒ)を携へ、菓子を贈るなどして傷病兵を慰問するばかりでなく、周到なる注意と熱心なる働き振りを以て如

何に人の嫌ふ如き仕事でも意に介せざる如く、極めて親切に看護せられたから其勞はやがて傷病兵の感謝、崇拜とを以て報ひられ、醫官等の篤き信賴と尊敬とを贏^②ち得るに至つた。就中負傷の身を以て敵國に捕虜の身となつた支那の士官、下士卒の女史を崇敬することは宛も人類以上のものの如くであつた。左にコックリル氏 (John A. Cockril) が記すところを見ると、^①「困憊せる支那軍人に日光ともなつた、も一人のナイチンゲール」と題して「威海衛水雷艇に勤務して負傷し日本に捕虜となつて來た一海軍士官がミス・タルカットが病院の勤務並に傳道に於ける活動を激稱せるところのものを紹介することにする。彼支那士官の談るところにてはタルカット女史は六十歳位の婦人であつた。全く宣教師らしき體度^③や風姿を避けて極めて目立たぬやうにし熱心に辛抱強く働かれた。彼女は決して公會の席で演說せらるることなく決してその履歷などにつき談らるることがなかつた。日本に於て斯くも廣く稱讃せられ其傳道事業を認められたものは前後無比であるといふことを彼を派遣したアメリカン・ボオドの新英州の友人等が聞いたならば如何に喜ぶであらうかが想像せられる。以下記すところ彼女の崇高なる品性に關する記事は捕虜であつた支那士官の横濱ヘラルド紙の爲めに執筆せるところである。

或宣教師の行爲につき

「一千八百九十五年二月の初めつ方私が廣島に到着してから間もなく日本の病院から我等の收容されて居るところに送られて來た二人の士官があつた。(この收容所は廣島市外の一佛寺に設けられたものであるが其地名等不明である。筆者^④) 兩人共旅順から北方約四十哩の地點にある金州城で捕虜になつた者である。其一人は腿部に他は腕に負傷して三ヶ月間病院にありて日本軍醫、看護婦の行届いた手當を受けて其親切に感謝して居る。

されど夫よりも更に聲を大にして彼等の讚美するのは一外國婦人の彼等捕虜に對する親切と愛の働きである。彼婦

人は好意の印しに菓子、果物の類を贈るのみならず士官はいふに及ばず文字を知るものには兵卒にでも新約聖書の一部を頒ち與へて之を讀ましめる其眞情は互に言語を通ずることは出来ないが誠意は其目顔に舉動に現はれ吾等支那人捕虜を感動せしめた。士官等は前には基督教は頑固な宗教だと聞いて居たのであるが爾來決して之に反對するが如き言辭を弄することなきに至つた所以のものは彼婦人の實例に見るが如く基督教の目的とするところは親切と博愛の外はないことが了解せられたからである。捕虜等は幾度も説教を聴かせらるるとも此婦人の單純な眞心の愛の與へたるが如き結果は生じないであらうと談り合ひ、其心は全く彼女の愛の優しさに融け去りてしまつた。余(海軍士官)は如何に頑固な保守主義の人の執拗な心も基督教の愛と慈悲の矢は射透さねばおかしいものだといふことを感じた。捕虜たちの會話は何時も彼婦人の徳行に向いて來るものだから余は一體左様な高德の婦人は何人なるかを知らんとする好奇心を起して或日、日本官憲に彼婦人の誰なるかを調べて彼女に余等を訪問せんことを頼み呉るるやう願つたが彼等は其筋の警戒嚴重にして外部の者が捕虜に接近することは容易に許さるることでないといつて居たが或日偶然吾等より願ひもしないのに彼婦人は收容所を訪問したが官憲の拒絶するところとなりて辭去するを知り、余等は思はず走り出でて板塀の隙間からしほしと失望して除々^(徐々)に歩みを運ぶ天使の姿の見えずなるまで見送つた。乾ける苗が憔悴して恵みの雨を待つよりも吾等が彼女を見んとする心が如何に切なるものであつたか。噫。

日の光の顔

三月になるとルーミス氏(Mr. Loomis)が吾等への其二度目の訪問をせられた。其時は四人の婦人を同行せられたが何を計らん其一人は噂に聞いた親切と博愛の精神で高名なタルカット女史ではないか。其容貌はキリストの聖愛に燃へて日の如く照り輝いて居た。内には歡喜の情が滿ち溢れて悲める者、心の傷める者に絶へず慰安と幸福とを與へんと待ち構へて居るが如くである。彼女は自ら神祕的な幸福を藏して居るやうであつて其泉の深さはとても吾等の計る

ことも亦理解することも出来ないところである。ここに於て吾等は多くの友が彼女について談りたるところは決して針小棒大の話でなく、吾を欺かなかつたことが肯かれた。一行が辭去せらるるに望み婦人等が「ちとせのいはよわがみをかこめ」の讚美歌を合唱したるときは吾等の内心は深く感動し、ルーミス氏が祈禱を捧げ「清國の上に神の恵の裕かならんことを」と願はれたるときは余は覺へず潜然と落涙した。再びタルカット女史が訪づられたのは四月であつて大阪のオルチン氏(Dr. Alchin)も同行して氏らは大きな密柑の籠を持參せられ「イエスと國民」と題する書を余に贈られた。タルカット女史は聖書研究に於ける吾人の進歩につきて質問し、身體的にも精神的にも吾人に對し深甚の關心あることを示された。云々」

女史の支那人捕虜に對する大阪での活動は短時日ではあつたが彼等に對する感化は最も深かつたらしいのである。

『ホノルルに於けるタルカット女史』 女史は明治廿九年(1896)年に賜暇歸米された。それは病院にて病兵の看護中コレラに感染せられた後病は癒へたるも尙健康の恢復を必要とされた爲めか、友人同僚の切なる勸告に依るか明かならぬが明治廿九年、卅年は歸米せられ三十三年(1900)には或期間ハワイのホノルルにありて其日本人教會に其仁愛、喜樂、謙遜、柔和されど剛健、勇猛なる聖者の姿を現はし活動せられた。彼女自ら何をも談られず余輩其事蹟につき何等知るところなしと雖も其深甚なる感化を與へたことは左の二つの事實に依りて証明することが出来る。其一つは嘗て長く日本にありて傳道し後アメリカン・ボードの幹事であつたエノック・ベル氏がタルカット女史の親戚(姉の息)ラーネツド博士に送りたる書簡の一節に「タルカット女史は吾等(夫妻)が出遇つた最初の日本宣教師である。其近邊はホノルルでの數時間に過ぎなかつたが印象は極めて深い。女史は親切に埠頭に來られ余等を迎へて叮嚀に其家族の一員として請せられた。吾等はとても女史の理想はおろか期待にそふことの出来ないことを能く知つて居たが女

史は決して少しも其失望せる如き様子は示されなかつた。共に居つたのは數時間に過ぎなかつたが其神に對する熱心を感じし且其傳道の精神に激勵せられた。其時感じた一つの事は談話に關する三つの法則即ち「眞實か」「親切か」「必要か」を反省、注意すべきことの教訓であつた。吾等は日本傳道のスタアトから女史の教へを服應^(應)し、善用した^(了)。思ふに此の教訓の服膺^(ふくよう)は一度ならず吾人の感情表現を制禦し得たのである。女史は實に吾等年若き宣教師に最も大切な言語を慎むべきことを指導せられた^(了)と。

今一つはホノルル日本人教會の左の感謝の表示である。

當地滞在數十日間始終一日の如く當教會の爲め熱心御盡悴の段感佩の至りに堪へず虔んで謝辭を陳べ爲記念本簿を贈呈す

第一千九百年九月十九日

在ホノルル府

日本人基督教會

トーカツ嬢

此の感謝記念帖は非常に見事なハワイ風景の寫眞帖にして神戸女學院の圖書館に保存されて居て時々展覽に供せられ其無聲の聲は永く女史功蹟^(績)の一端を語るものである。

女史のハワイ滞在中の生活の眞相を推定し得べき此の二個の遺物の存することは筆者の最も欣幸とするところである。

『晩年のタルカット女史』^① 明治三十三年から約十一年間は神戸女子神學校（當時は傳道學校と稱して居た）の教授とし

て校長コザアト（Miss Cozad）女史を援けて婦人傳道師の養成に盡力する傍實地傳道に従事せられ常にキリストの愛を彼女に接するすべての人に感得せしめたのである。筆者は明治四十年より女史の知遇を忝ふしたから其觀察せるところと筆者よりも更に女史に入懇であつた友人諸氏の語るところを綜合して吾人の見聞せる女史の行動、傳道の方法（^マ）人に接するの道、特に重荷を負へるもの、悩める者に對する女史の態度につき簡単に列記することにする。

1. 言葉と行と信と愛と潔とを以て信者求道者の模範となられた。しかもそれが有意的にはなく篤く信じて天父の恩寵を享けられたる結果、内に滿ち溢れて自然に言葉となり、行となるのである。例へば汽車、汽船の中にて話しかけて知り合ひとなると、やがて小冊子を與へて讀ましめる、勿論談話の形式で世間話に連絡をつけては教義を説く。キリストの愛を教へる、別れる時には住所を書きつけて近ければ自分で訪問する。遠ければ其土地の牧師、教會員に頼む。小冊子を送る、交通する。訪問の途中道を聞き家を尋ねると其人にすぐに傳道しかけるといふ如き何れも與へられた刺激に對する反應は盡く天性の如く、亦固定した習慣の如くに働くのである。故に他人の苦痛、煩悶、懊惱に接すれば普通人では信者でも單に同情を表し或は共に泣く^{（E）}の程度で己むか聊かの物質的寄與をして別れるのであるが女史のは物質的にも、精神的にも力を竭して結果を見届けるまで深い關心を以て其人の身の立ち行くまで文字通りに寢食を忘れて世話をせられる。曾て雲内教會に一人の青年があつて不幸産を失ひ業に離るるの苦杯を嘗め、家族を支持するのに甚だしく困難を感じた。女史は彼に牛乳配達を勧め自ら奔走して知人の家を訪問して事情を告げて彼の青年の牛乳を用ふべきことを勧められる。女史の勧めを受けた者は其聖愛に感激して其青年の華客となるものが多かつたから忽ち彼は兎にも角にも糊口の道を得ることが出來た。筆者は當時の七十歳に近き老聖者、しかも婦人の身でありながら一青年の爲めに努めらるる姿を見て覺へず感涙を催

したが聖者自らは如何にも楽しさうで、善をなすを以て悦びの極みとせられ勞を忘れて居る如く頗る朗らかであつた。

2. 忘我の人であつた。人は皆努めて善を行ひ人の爲めに僅かの犠牲をなせば必ず之を記憶するのに女史のは全く嗜んで善を行ひ、行ひて殆んど恍惚境に入りて身の危険も、人の批評も何のその、犠牲を犠牲と感ぜず、全く忘我の境に入られて居たことは事實である。女史を以て日本に於けるフローレンス^(史)・ナイチンゲールとなし、クララ・バアト^(史)ンに擬するのも至當であるが余には女性には聖フランチェスコの面影があつたと思ふ。女史は人の爲めになら文字通りに寢食を忘れ、晝夜を別たず貧民、病者の勞苦を慰められて其身を忘れられたのである。岡山に居られし時某醫師を訪問せられたるに其家の幼兒が發熱して泣いて居るので女史は之を其懷に抱き上げてあやして居られた。主婦は之を見て「先生、主人が出かける時にややは天然痘かも知れないと申して居りました。危険で御座います」といつても女史は少しも逡巡することなく幼兒を愛撫し續けられた。^②幸に其兒は天然痘に罹かつて居なかつたといふことであるが女史の人の爲めに身を忘れられた事はこの逸事に徴して明である。亦或時は鳥取に於て固陋な一士族が強く基督教に反對し白刃を擬して女史に立ち向ひたる時も神色自若騒がず驚かず平素の閑雅な婦人らしき態度を保たれたが暴漢も其威に壓せられたるものか容易に手を下すこと能はず。其中人が来て女子を危難より救つたといふことである。されど女史の^(史)苟も自分の身に關したことは忘れて惱める者の幸福をのみ其注意の焦點とせられたことが遂に日清戰役後コレラ病流行の際之に感染せられた所以でもあつたらうし、八十、九十の高齡にも達せられ得べき極めて强健な體格であつたのに七十五歳で永久の休息に行かれた原因でもあつたと想像せられる。

同じやうな話しだが女史一日車にて地方傳道に出かけられた時途中にて車夫が腹痛を起して苦んだ。女史は別

の車夫を雇つて目的地に行かなくなると其町の宿屋に其車夫を泊らしめて自分も同宿して終夜看病せられた。^③宛もイエス傳の一節に見る如き傳話である。

少し違つた種類の逸話であるが、女史は富家に生れ美的趣味の高い人であつたから服裝も質の良い、上品なものを嗜まれたのであるが一日上着を新調しやうとして元町の某店に行かれた。あれこれと服地を選択して居られる間にふと村松淺四郎兄の經營して居る愛憐館——出獄人保護事業——に資金の必要あることを思ひ出され直に服地の購入を中止して之を同館に呈供せられたといふことである。^④女史は愛憐館の創立と其當初の維持には深い關心を以て盡力せられたのであつて村松兄の献身的努力には滿身の同情を注ぎ個人的にも村松氏を岡山の石井十次、炭谷小梅、神戸の座古愛子などの諸氏と共に肉身の子の如くに思つて居られたのである。故に以上の諸氏も常に喜憂共に女史に懇^{うつつ}へて互に感激を交はされて居たといふことである。

3. 女史の洒落。愛と威に輝く大きな眼球、廣く高き前額。秀でた其鼻、頬の肉はほほ笑を現はせども一文字に結べる其唇、皆其眞面目と熱誠と愛と潔きとの表現でないものはない。されど意外女史は滑稽趣味に富まれ、人の疲勞したり、退屈したりして居ることを直覺せられると一同を哄笑せしめて全身の筋^筋に施^地緩を與へ、氣分の轉換と休息を與へられる一種の才能を持つて居られた。

明治十四年ベテイ氏ら宣教師の一行が中仙道の山道にある一寒村に宿つたことがあつて日曜を過したことがある。女史は一行の爲め退屈凌ぎに Mark Guy Cease の書を朗讀せられた。當時は未だ地方では外國人が物珍らしかつたから宿の女は度々宣教師を見たくて頻^りに其室を覗きに來た。朗讀の進む間には時々質問を發する者があつて女史屢中止するの已^えむなき事あるも更に厭はず朗讀を續けられた。其中に女史がページをまくられるとそこに齒の抜けた顔の鼻と顎とが殆ど接觸して居るやうな漫畫が現れた。丁度其處に見に來て居た宿の女が之を見て女史

の顔と見較べ「これはあなたの繪ですか」といつたので一同笑ひ崩れたといふことである。蓋し女史は其ボンチに似た顔をして宿の女に示されたのである。^⑤

明治四十四年の六月神戸女子神學校の卒業式後何時も何處でもあるやうに記念撮影の順序になつた。來客に來ぬものがあつたり、寫眞師の手筈が整はなかつたりして時間が過ぎて人々に倦怠の色が見えて來た。さうすると皆の前を一人の丈高き婦人が男子の帽を頂き悠々として闊歩して見返るのであるのと同覺えず哄笑した。女史が筆者の帽を^(ひそむ)窃に取りて用いられたのである。

4. 生命の源泉。女史に接する何人もが力を與へられ、重荷を下して貰う様な氣がしたり暗夜に光明を得るやうな感じのしたのは常であるが、其處には女史が自分の思想、感情、時には意見までも^(任)托げられた犠牲の結果であることに氣附かぬ人が多くはないかと思はれる。

或時一人の絹布商あり、商勢甚だ振はず、漸次資産を^(つく)倒盡して百方力^(つく)竭せどもすべて失敗に歸し遂に自殺を覺悟した。其友にタルカット女史を知るものがあつて彼に女史の許に行きて相談することを慫慂した。女史は一夜窃に來たれる終始頂垂れて居る來客と密室で長時間の會見をした。其何を語り合へるかを知る者更になく、其客の名さへ知るものは今にないが、來た時に引き換へ女史に見送られて辭し去る彼は意氣軒昂、元氣に満ちて居た。^⑥彼の將來は活ける生命であり、成功であつた事に疑はない。

一人の年若き牧師が米國留學を志し女史に援助を求めたが女史は彼の教會に對する義務を思ふ餘り同意を與へなかつたから彼は女史に對して氣を悪くしてしまつた。女史は其反對が到底彼を引留むることが出來ないのを悟ると全く其意志を棄てて斷然彼の渡米を援助することとなつた。そこで女史の努力で彼の青年牧師は幾通かの紹介狀を手にしてサンフランシスコまでの渡航費を得て彼地に着すると意外にも女史の友人は彼を迎へて種々の便

宜を與へ、其目的地たる東部にまでの旅費、被服までも整へて呉れた。目的地でも女史の友人は懇切に彼に便宜を與へて呉れたので彼は女史に對し泣いて其無禮を詫び感謝したといふことであるが女史は決して其名を告げないから誰であつたか知る由もない。女史は終始其爲せる善を隠し通したのである。

5. 優れた教育的テクニク。女史の傳道も教育も決して種の時き放しではない。巧妙な方法、今日の所謂教育テストを四十年前の前から、心理學者の夢にも考へて居なかつた時から實行して居たのである。女史が小冊子を與へるも聖書研究を勧めるのも次の面會時には其進歩の程度を適當な問答で確かめて次の小冊子を與へ又は訓話をする。教ふるのと自學せしめるのと常に兩方面から導いた。女子の個人傳道成功の秘訣は決して其惜みなく恵み與へる時間と勤勞とのみの功果ではなく當しく其教育的卓見に依るのである。

一夜女子神學校でクリスマスの祝會がありて筆者も之に參會した。木には多くの聖誕節の裝飾がしてある外に白い小さい折りたたんだ短冊の如き紙が下げてある。會の半ばになると女史は「皆さん彼の紙を一人が一枚づつ取つて書き入れて私に渡して下さい」といふことである。學生、牧師、教師一同が其紙を取つて開いて見ると、聖句が五つ(?)聖書の書名、章節が五つ(?)と書いてある。甲には其聖句のある書名、章節を記入し、乙には其聖句を記入するのである。全く遊戲化された今日の教育テストであつて筆者の記憶では來會の中黒木さんといふ女子神學校の生徒が女史から一等の賞品を貰つたと思ふ。

筆者は少しも彼女の徳を誇張するやうなことはしなかつた計りでなく寧ろ禮を失する程に筆を差扣へた場合が多かつたが材料を^(渉獵)獵涉する間に嗚呼此婦人は聖者である、基督的婦人の典型であると感激措く能はざるものがあり。顧みて己が此人の傳記を書くには甚だ不適當なるを痛嘆した。

昭和十年十月九日彼女の誕生日の三日前。

註解

『血統と家庭』

① この項の叙述の大方は、タルカット女史の妹ローラ・E・ラーネド夫人(Mrs. Lora E. Learned. 以下LELと略す)の *Eliza Talbot* なる小冊子(ボストンの婦人伝道会によるパイオニア・シリーズの一)に據っているものと思われる。これは、現在その一部をデフォレスト女史(Miss C.B. DeForest)の手になるスクラップ・ブック“*Eliza Talbot, Founder of Kobe College*”(『学院史料』以下「史料」と略す)第四号四一頁参照)の中に見い出すことができる(九頁18)が、近親者の記述であり、公文書の中に私事を語ることの少ないタルカット女史の知られざる一面を伝える貴重な記録である。殊にタルカット家の来歴や女史の私生涯の部分をこの書中に求めることは妥当であろう。但し、誤記が校正もれか、辻褄の合わぬ記述も若干見い出される。

②③ LEL前掲書一頁。

④ 前述のスクラップ・ブックに納められた一九二六年九月二十四日附デフォレスト女史宛てのJ・G・タルカット氏の書簡によれば、このジョージ・タルカットなる人物は当時ロックヴィルに在住していたが、タルカット女史のことは何も知らなかったという(「史料」第四号一一頁24参照)。

⑤ この部分はLELの前掲書ではなく、タルカット女史帰天直後の一九一一年十二月に発行された *Mission News of the A.B.C. F. M. in Japan* (以下MNと略す)誌上のスタンフォード師(Rev. A. W. Stanford)による追悼記事(同書四六頁)からの引用であらう。

⑥ 米国伝道会日本派遣宣教師ラーネド博士(Dr. D. W. Learned. 以下DWLと略す)が一九一一年十一月十六日附でスタンフォード師に出した手紙(「史料」第四号八頁13・補を参照)には、タルカット家には「四人の子供があり、皆女の子でした。長姉はフィッシャー夫人(Mrs. Fisher)で、ミス・タルカットは二女、私の母(先述のローラ)である。―若山記)が三女で、末娘が一八八一年から二年間当地(日本―若山記)に来ていたミス・マリアでした」とある。

⑦ LEL前掲。

『教育と教師生活』

① 主たる典拠は同じくLEL前掲書とMNのスタンフォードの記事である。但しタルカット女史がウィリアム・ブルの家庭に在ったことはDWLに見られるが前記二書には明確な言明がなく、また、お婆の看護の件はスタンフォードのみが伝えている。

② スタンフォードによれば一〇年。但し一八五七年に学業をおえた女史はその後通算六年教職に携わったのち家庭に戻り、やがて一八八三年三月には日本に向かって旅立つことになるから、その間厳密に言えば一〇年に足る歳月はなかったかもしれない。

③ 「叔父ウィリアム・ブル」の家で「伯母」の看病をしたという点については、英文にはそれぞれ、their uncle William Bull また an invalid aunt とあるのみで、女史の母スーザン(Susan Bull)と前二者の年齢序列を明らかにしていないため、漢字によ

る表記に混乱が生じているもよう。「伯母」はウィリアム・ブルの夫人であろう。(傍点・若山。以下同じ。)

『外國傳道の決意』

① この項は全面的にスタンフォードの記事に據っている。

② 女史の決断の最終的契機となったのが一八七二年の伝道集会であったとはLELも記すところであるが、こちらにはその時の宣教師のいかにも心をそそる科白は書きとめられていない。LELによれば、この年ニューヘイヴンでの米国伝道会の宣教師募集の集会に出席して、「彼女は直ちに自問し始めた。もしも伝道会が喜んで自分を派遣してくれるとしたら、出かけずにすまずに足る立派な口実があるだろうか」と。そしてついに、自分につとまる場所を諮問委員会がお考え下さるならどこであろうと赴きましようとし出したのであった。(LEL前掲二頁。)

『タルカット女史の日本來朝』

① 一八七二年五月二十二日をもって女史は満三六歳になる。蓋し当時の慣行により数え年によったものであろう。一方LELが「時に彼女は三四歳 (thirty-four years old) であった」と記したのは何故であったか。

② 女史の任命の経緯については、LEL、DWL、またデフォレスト女史の *The History of Kobe College* (創立七十五周年を期して書かれたため、以下「七十五年史」と略す) 等が興味深い記述を残している。すなわち、

LEL「時に彼女は三四歳であったので、東洋の難解な言語をもっと年若い婦人たちがほどたやすく習得し得ないのでないかと、諮問委員会の側に多少のためらいがあった。しかしその結果は、神は御自分の召し給う者を御存知であるということの証しとなったのである。」(LEL前掲)

DWL「私は、彼女は宣教師になるつもりである——と聞いた時、彼女ならまさにうってつけの人であろう——と一人言ちたことでした。もっとも彼女自身は自分がそれに適しているとはそれほど確信していませんでした。実際、自分の資質をいとも控え目に述べたもので、担当書記(トリート氏であろうと思います)は、彼女はこういう事に従事しない方がよいのではないかと返事をしたものです。幸いにもプリマスの彼女の牧師E・B・ヒラード氏がこれを耳にし、トリート氏に手紙を出して、逡巡をすっかりとり除いてくれました。」

七十五年史「年経て、この同じ書記は彼女に書き送った。『何とみごとな大失策となったことでしよう、もしも私が、あなたの遠慮がちの自己評価に惑わされてあなたにその偉大な活動をさせないことにしていたらノ日本のため、また世界中のキリストの王国のため、多くの者の祈りに応えて、私のよりも更に高き叡智が私を導き給うたのです』と。」(同書一頁。)

③ LEL前掲。また一九一一年一月発行の *Life and Light for Woman* (以下LLと略す) 掲載の記事(一〇—二三頁) 併照。

④ タルカット女史自身の記すところによれば、「横浜まで二六日間の船旅をいたしました。……横浜に着きましたので、わずかの時間ではありましたが、ルーミス氏とブライン夫人とをお訪ねいたしました。……大阪湾に碇泊いたしました三十一日の朝、

グリーン氏とデイヴィス氏とがわたくし共を出迎えて下さいました（タルカット書簡一八七三年四月十二日附）ということであるが、航海日数も神戸入りの日附も、爾来書き手によってまちまちである。伝道会本部発行の *Missionary Herald*（以下 *MH* と略す）は女史の一行が三月一日にサンフランシスコをたつたこと及び同月三十一日に神戸に着いたことを、同年四月号一三三頁及び八月号二六九頁に報じているが、*LEL* は航海二七日説をとり、*DWL* は神戸着を三月三十日とする（但し兩人共当時日本に在ったわけではない）。この航海日数上の一日の違いは、故鈴木恒彌教授によれば、日附変更線を考慮に入れたかどうかの問題ではないかということであったが、到着日の異同については不詳である。

一方、当時の *Japan Mail* を繰ってみると、女史の一行が乗ったのは米国籍の郵便船で名を *Japan* と言い、三月一日にサンフランシスコを出港、二十九日に横浜に入港、三十日に最終目的地香港目ざして出港—との記事があり、横浜までの乗船者名簿の中にタルカット女史の名が見える。但しこの船が神戸に寄つたものか、女史が横浜到着後同じ船で神戸に向かったものかについては記録がない。またこの船に関しては出入港の時刻も航海報告も載っていないため、なお肝心のところが未明である。しかしもし女史がこの船で神戸までやって来たものとすれば、横浜出港が三十日であつて、神戸到着は「朝」ということであるから、当然これは三十一日ということになる。なお、「七十五年史」が横浜到着後数時間で神戸に向かったとしているのは、前掲タルカット書簡の「わずかの時間ではありましたが」のくだりに引かれたものであろうか。

補・タルカット女史の来日を先任宣教師たちに告げる公式文書が本人と同じ船に積まれていたために、女史を迎える準備の整つていなかったことが宣教師文書によって知られるが、この事件はまたタルカット女史の性向を窺わしめて興味深い。

四月十五日附デイヴィス師 (Rev. J. D. Davis) の手紙—「私は、この現場に婦人を派遣することに關し、一言申し述べずにはすませない気分でおります。タルカット女史来日においてなされたやり方がそうさせるのであります。私共はダッドレー女史を待つておりました。女史から、やって来るとの便りがあつたからです。しかしタルカット女史の来日についてはダッドレー女史の手紙にはめかされていた以外には伝道団は何も知らず、従つて女史を受け入れる準備を前もつてしておくことができませんでした。私共は横浜にダッドレー女史歓迎の手紙を書きました。そしてその中に、もしタルカット女史が一緒なら歓迎する—と。タルカット女史は、伝道団が彼女を予期していなかつたこと、そして女史の住居のためとして何ら特別な準備ができていなかったことを知らざるを得ませんでした。当然のことながら女史は、みじめな、多少とも気の滅入る思いをしたのであります。女史の場合、このことから重大な支障が生じたわけではありません。しかしこれが、もっと若くてもっと自律心のとばしい婦人の場合であれば、結果はもっと由々しいものとなつたにちがいありません。私共は、タルカット女史を得たことは伝道団にとって非常な利益であると考えております。またデイヴィス夫人は女史を姉妹のように愛するに至つております。」

タルカット書簡前掲—「この日出づる国よりお便りを差し上げ、かつ、当地の伝道団の心からなる歓迎を受けましたことをお伝えできますのが、嬉しうございます。……わたくしは、大変あたたかい歓迎を受けましたもので、自分がとび入りの客であつ

たとは、数日後まで知らなかったくらいでございました。」

同六月十六日附―「六月二日附（この日附には疑問があるが……。若山記）貴信只今頂戴いたしました。そうしてわたくしは、たとえ自分が前々から予期されておりましたが、これ以上の心からなる歓迎を受けたり、また、デイヴィス氏御夫妻のお宅以上に心地よい家庭を供されたりすることはできなかったことでありましよう」と確答申し上げられるのが嬉しうございます。」

そして、DWL―「私は、デイヴィス博士から聞いたことを思い出します。女史が、偶々伝道団への事前連絡なしに来日し、暫時デイヴィス家に寄寓することになった時、夫妻がどれほど感銘を受けたか―ということです。夫妻は、女史のあのような姿、私は、女史が全く予告なしにとびこんで来てしまった場に調子を合わせようと努めているせいにちがいない―と考えました。ところが来る日も来る日も何の変化も見られませんでした。そして夫妻は、これが彼女の真の我なのだと知ったのです。」

⑤ 『天上の友』日本組合基督教會教師會編 大正四年、一八〇頁。
『神戸女學院の創立』

① この項の前半は、多くを、大学部37回卒業生小西（旧姓浅田）すま姉による「創立五十年 神戸女學院史 明治八年―大正十四年」（以下「五十年史」と略す）に負うている。殊に、正式開校前後の生徒数や生徒の氏名を記し、タルカット女史を「男性的」ダッドレー女史を「母親の型」と述べ、甲賀ふじの「行き届いた」ところを紹介するくだりの典拠は、これ以外のものではない（該書一〇～一五頁）。ほかにはMNの若干の記事が参照され得たかとも考えられるが、最も公式かつ即時的であるべきはずの宣教師文書の中には、これらの事柄を明快に裏づける証言を見出し得ないのが現状である。

② MN一九〇八年一月号にはタルカット女史自身の回顧として、当初、前田家の一室を貸与されて日に数時間数人の少年少女に英語を教えた―という記述がある（五五頁）。

③ LEL「イライザ・タルカット」三頁。

④ 現行讃美歌では五〇二番。

⑤ この学校が創立当時から「神戸英和女學校」の名をとったのではなかったことは、その後の史料操作によって知られるとおりである。当初は単に神戸の「女學校」（英文中では「the Girls' School in Kobe」と呼ばれた。校名の変遷についての詳しい考察は『神戸女學院百年史 総説』（以下「総説」と略す）四六～四八頁と六三～六四頁に俟たねばならない。

⑥ 既述の如く、正式開校前の生徒数と同じく開校直後の生徒数やその氏名に関しては、ここに引かれた「五十年史」の情報以上のものに現時点では接し得ていない。米国伝道会の *Annual Report*（以下ARと略す）は開校の前年に生徒数二五名と報じ（A.R., 1874, p. 60）、翌年、開校時には寄宿生三名通学生二四名、現在には三四名中寄宿生一〇名と伝える（*Ibid.*, 1875, p. 59）が、創立二十周年のタルカット女史の「感話」によれば、寄宿生は当初清家ふみ、甲賀ふじを含めて五名であった（「めぐみ」一二号一八頁）。また、創立の翌年頃なお男子生徒のあったことが当時の在校生の懐旧談によって知られる（同前四八号一五頁）。「村田き

よ」は「村山」。

⑦ タルカッ卜書簡には、「わたくし共は皆、少女たちは自分たち本来の簡素な生活様式を採るべきであると思っております。外国の生活習慣を採用いたしますと、元々の友人たちとあまりにも隔たってしまうことでございましょうから」(一八七四年八月七日附)、「この少女たちには、単に宗教教育のみではなく、彼女たちが他の人々の教師となってやってゆけますような世俗の訓練をも受けさせとうございます」(同年五月十六日附)、「けれども、わたくし共、日本における知的教育の水準を高める助力を心がけておりますもの、わたくし共の最大の望みは、これら愛しい少女たちが、まじめで聡明で克己心のあるクリスチャンとなることでございます」(一八七七年八月七日附)等の所信が表明されている。但し本文中の「基督魂を持った日本風の婦人」といういかにも妙趣に富む言いまわしについては、現時点ではその源を「五十年史」に見るのみである(該書一四頁)。

⑧ MN前掲、タルカッ卜女史の回顧の中にもこの話がある。

⑨ 「神戸女学院百年史 各論」(以下「各論」と略す) 八〇頁及び八五〜八六頁を併照されたい。

⑩ タルカッ卜女史はかなり早くから、市井の婦人たちに対する伝道活動に心ひかれていた。「わたくしは、学校の重要性を無視するつもりはございませんが……時には本当に、家庭の婦人たちの間での活動が有望なものですから、わたくしがより広い視野に立ち、わたくし共の仕事は将来どれほど多くの少女たちのお蔭を蒙ることになりますかを実感いたしませんと、学校での仕事にはほとんど満足を感じさせられなくなります」(タルカッ卜書簡一八七四年十二月一日附)、「わたくし共はこの学校に輝かしの希望を抱いております。けれども、わたくし共は、婦人たちの間で一般的活動に携わる欲びを、これまでよりも差し控えなければなりません」(一八七五年八月四日附)と告白した女史は、ついにはっきりと学校業務の後継者派遣を願うに至る(一八七七年二月六日附)。クラークソン女史が米国伝道会の照会に応えて日本赴任を決意したのはその年四月下旬のことであった。実際にはこの校務責任委譲の経緯にはかなり円滑を欠くものがあった(「七十五年史」一一〜一三頁、「総説」五七〜六二頁、クラークソン書簡「史料」一〜三号参照)が、このことにつき、タルカッ卜書簡には何の言及も見られないことが興味深い。

一方、ダッドレー女史はすでに、一八七六年夏に健康を害して以来、学校業務から手をひいて一般の伝道活動に盡瘁していたが、同じく学校業務と一般伝道活動を兼務して過労に倒れながらも「外部の仕事から手を引くべきだと言われておりますが、私にそれができるとは思いません」と告白していた(バロウズ書簡一八八〇年一月二十三日附) 従妹のバロウズ女史と共に「婦人たちの間での活動に専念する」(同前ために、校外に別の「ホーム」を持つことにしたものである。この新しい「ホーム」はやがて神戸女子神学校となり、聖和大学の一源流となる。三女史の転出は一八八〇年秋のことであった。

⑪ この引用には転記の際の誤記らしいものがいくつかある。この筆頭末尾の記名で、原典は「女學校、タルカツ、ダッレー」である。また掲載の日は八月十八日と二十五日、号数は三三、三四号。(その他、用字ふりがなの異同にはここでは触れない。)

⑫ ここに掲げられた図は、上段が明治八年建築の南舎、下段が後に増築された校舎を示す。後者には「明治九年増築の」と説明

がついているが、これは肯じ難い。これらの図を今に伝えるのは「七一雜報」明治十年（一八七七年）四月十三日附（上図）と同日附（下図）とであるが、後者につけられた記事には「新に建んとする」また「日ならずして落成にいたるべし」なる文言が見られ、更に翌年三月十五日附同誌が、同月七日に女學校が新校舎完成の「開場」を行なつたと報じているからである。このことは「総説」五一〜五三頁にも論述されている。なおタルカット書簡一八七七年二月六日附、八月七日附も参考になる。

経費については、四月二十日附「七一雜報」に、二階建ての増築校舎の「下の、一室を設くる人は舊三田藩知事九鬼公にして：此費金は三百七十五圓」とあり、階上の部屋は一室あたり七十円を要するがこれは有志の據金としたい旨が明かにされている。

『中國活動』

① 以上はLEL前掲書三〜四頁に全面的に依據している。「學校に於ける最後の集會に關する女史自身の記事」及び女史の日頃の言辭というものは、蓋し妹ローラ宛ての私信に記されたものであつたろうか。一方、宣教師文書に残る女史の当時の書簡（七月五日附）は、深い感慨を行間ににじませながらも、感情的な語句を交えず、終始抑制のきいた筆致で認められている。

補・但しタルカット女史はもう一度「女學校」に戻つて来る。一八八二年早々、クラークソン女史が健康上の理由で帰米を余儀なくされたことにより、校長職代行を伝道団から要請されたためである。女史は前年より来日していた妹マリアを伴つて帰任し、同年十二月に第一回卒業生を送り出したのち更に一年間校務を見、一八八三年暮に後事をブラウン女史（Miss Emily Brown. 一八八二年十一月来日）、ソール女史（Miss Susan A. Searle. 一八八三年十月来日）に委ねて賜暇帰米の途についた。再来日は翌年の九月。以後一八九六年の二度目の帰米まで本項後段以下に語られるが如き精力的な活動が続けられる。再来日は翌

② 以下、岡山、鳥取、広島における活動のことはMN一九一一年十二月号のベティ師（Rev. J. H. Pettie）の記事（四九頁）に據る。

③ 「各論」六四〜六五頁、神戸女学院學報三一号「タルカット先生と石井十次」等併照。

④ 「各論」一四四〜一四五頁併照。

⑤ Miss Ida Augusta McLennan. 来日一八八六年。一八九二年に岡山在任の米国伝道会宣教師ホワイト師（Rev. S. S. White）と結婚。改姓。

『日清戦争とタルカット女史』

① MN前掲。ゲイネス（Miss N. B. Gaines）はゲインズとも書かれている。南メソジスト伝道団の宣教師で、一八八六年広島女學校（現広島女学院）の創立にあたり初代校長として召聘された。

② Rev. B. G. Northrop, "The Clara Barton of Japan," *The Congregationalist*, 27 Feb., 1896. （「史料」四号六頁4参照）

③ John A. Cockrill, "A Missionary Heroine, Another Florence Nightingale who has brought Sunshine to Distressed Chinese Soldiers,"—*Special Correspondence of the Herald*, 1 Oct., 1895. （同前）

④ この地震が起こったのは明治二十四年(一八九二)十月二十八日である。ペティーは、この年のクリスマス休暇に、ロウズ女史・タルカット女史が被災地でヴォランティアとして働いたと報告している(MH 一八九二年三月号一一〇頁)。

⑤ 『同志社百年史 通史篇一』第十一章には、「この学校の名称は京都看病婦学校であり、同校は同年(一八八七年)若山記 八月一日知事により認可された、同年十一月五日、京都看病婦学校・同志社病院(および同志社書籍館)の開業式が行われた」とあり(二八八頁)、『資料編一』にその認可書及び開業式の式次第が掲げられている(四〇四〜四〇八頁)。但しこのタルカット伝と同時代の『我等の同志社』(創立六十周年記念誌)には「明治二十年八月同志社病院を設立し、併せて京都看病婦学校を設立し……」との記述もあり(二頁)、口伝に諸説があったものかと考える。

⑥ 女史の京都転任は明治二十三年(一八九〇)秋のことであった。(『史料』第四号四〇頁の註⑩に典拠を掲げる。)

⑦ 以下は、前掲コックリルの記事の全文を和訳したものである。

⑧ この「筆者」とは横川教授のことである。

⑨ 「廣島」の書き誤りであろう。前段の「大阪のオルチン氏」なる一節に引かれたものと思われる。

補・広島(の病院)における伝道活動に関する記録の初出はMH 一八九五年四月号に見られる一月十二日附ペティー書簡であるが、同年夏にはタルカット女史自身が米国伝道会と同婦人伝道会とに報告書簡を送っており、後者はその一部をL 一八九六年一月号に掲載された。これを見ると、女史は二人の日本婦人と共に(同じ頃の「旭光」は「トーカー女史、加藤姉、保久姉」と報じている。一八九五年八月五日附)午後一時半頃から六時まで、三つの大病院の三〇病棟を順ぐりにまわっているが、「わたくし共が一度に訪ねられますのは三つか四つにすぎません。患者たちはしばしば他の病棟からわたくし共の会いに来てくれます。そして病院の夕食の時間が来てわたくし共がとび出さねばならぬ時、『この次はどうか私の病棟に来て下さい』とたのまれることも稀ではありません。わたくし共は書物やトラクトを貸したり、リーフレットを配ったり、また時には、たずねたい問題を持っている人があれば足をとめて、共に聖書を読みます。……」(二二〜二三頁)とある。

『ポノルに於けるタルカット女史』

① 一八九五年はコレラが猖獗を極め、広島にはまた回帰熱の発生もあった。タルカット女史のコレラ罹患の正確な時期は手元の史料ではなお未詳であるが、MN 前掲五〇頁によれば、女史は数週間の賢明な療養によって回復し、再び広島に戻って十二月まで病院訪問を続けたという。但し、十二月二十二日附タルカット書簡は京都発で、数週間来疲労が甚しくて仕事にさしかえるため休暇帰米を勧告された旨を伝えている。かくて、翌年二月十四日神戸発、五月十二日サンフランシスコ着。当初は一年程度の休養のつもりであったらしいが、回復には意外に時日を要し、一八九八年にはクリフトン・スプリングスの保養所生活も体験した。更に翌年は離米予定日前に左腕に腫物を生じて出発を延期せざるを得なくなるなど、帰任への途は多難であったが、ついに一九〇〇年六月六日、ハワイ経由で日本に帰任すべく、サンフランシスコを出立した。

② 女史がハワイに立ち寄ったのは、O・H・ギューリック夫妻はじめ現地の人々から暫時の助けを求められたためであることが、一八九九年八月三日附タルカット書簡によつて知られる。このハワイ滞留について、LELは次のように記している。

「彼女はついに回復したので活動を再開してもよいと考え、「帰任の」途上、ハワイで一時下船する計画をたてていた。その時、ハワイの伝道団から我々の伝道会に対し、「ハワイ」諸島における日本人伝道に任せられたドレムス・スカダー博士に着任の用意ができるまで、彼女の手を借りたいとの要請があった。これは紛うかたなく神の懇ろなお計らいであった。それというのも、温暖でのどかな気候はまさに、彼女に必要な回復の助けとなったからである。ここの活動は二年半に亙り彼女を引きとめたが、彼女はこれに大いに関心を持った。しかしこの務めを解かれ得るや、彼女は自分を呼び求めている日本に在る友人たちのために「活動を」続けることを喜びとしたのであった。」(LEL前掲書八頁)

なお、AR一九〇一年及び一九〇二年の「ハワイ諸島」報告は、「日本人間の活動」と題して、女史がホノルル在住の日本人家族、とりわけその婦人たちを対象に評価し難いほどの奉仕をしていると伝えている(二二〇頁、一四二頁)。しかしタルカット女史自身の報告ということになると、一九〇〇年以降の日本伝道団関係宣教師文書の中に女史の書簡をなぜか一通も見出し得ないため、わずかに、LEL一九〇二年三月号において二四行ばかりの消息に接し得るにすぎない(二一八―二一九頁)。年頭四日間の街頭説教を含む特別伝道集会の模様を伝えるものである。

③ Enoch Frye Ball 在日は一九〇二年十一月から一九〇五年三月。帰米後米国伝道会の Assistant Secretary に就任。

④ すでに再三引用しているスタンフォード宛ての手紙の書き手、D・W・ラーネド。この人がタルカット女史のすぐ下の妹、ローラを母と呼んでいることはすでに見たとおり(本稿、二五頁註⑥)である。

⑤ この手紙の写しはデフォレスト女史のスクラップ・ブックに納められている。「史料」第四号八頁13参照。

『晩年のタルカット女史』

① 女史が三度日本の土を踏んだのは一九〇二年十二月二十二日。従つて神戸女子神學校に在つて伝道と伝道者養成とに盡瘁すべく女史に許された時日は九年に満たなかったが、その活動の場は、近畿中国はもとより北は札幌、南は宮崎に及んだ。しかし相変わらず米国伝道会の宣教師文書中に女史の書簡は見当たらず、またいづれの伝記作者もこの時期を具体的系統的綜合的に語ってはいけなかった。本項も例外ではない。そこで、現在知り得る若干の事跡はとりあえず本誌前号の「イライザ・タルカット女史略年譜」において見るにとどめ、ここでは、女史最晩年の出向伝道地宮崎からの便りの一部を紹介して結びの補遺としたい。

「およそ八年前の日本帰任以来わたくしは神戸の女子神學校と相携えて働いてまいりました。昨秋、バロウズ女史が、三十年前にダッドレー女史とお始めになったこの仕事に復帰なさり、しかもここにはコザド女史とスタンフォード夫人もいらつしやいますから、もはやわたくしが神戸にいなければならぬ必要がなくなりました。そこで、少なくとも四つの伝道区が助力を求めております中で、宮崎の要請が最も緊急なものと見えましたので、十月(一九一〇年)のことである。―若山記)の初めに当地にやっ

てまいりました。……どうぞお祈りの折りにこの活動にお心をおかけ下さいませ。そして、わたくしの役目と思われまふことのためにこの力が続きますようにと、お頼み下さいませ。」(『L』一九一一年四月号一七〇～一七一頁。)

女史は三月まで宮崎に在った。その八か月後の一九一一年十一月一日、七五歳と五か月余で帰天。極東の「小暗い土地に福音の光を与えるために」(タルカット書簡一八七三年四月十二日附) 女史が捧げた歳月は、三八年と七か月をかぞえる。

②③④ MN前掲四七頁、スタンフォードの記事に據る。

⑥ 同前五頁、ケリー夫人 (Mrs. E. E. Cary) の記事から。なお、女史が朗読していた本の著者名は原典では Mark Guy Pease となっているが、これは Mark Guy Pearse の誤まりであらう。

⑦ 同前四七頁、スタンフォードの記事から。

⑧ 同前四三頁。筆者名は M. R. P. のみ。

⑨ タルカット女史の誕生日は、このタルカット伝のはじめの部分にもある如く、五月二十二日である。十月九日は、神戸に「女学校」が正式開校した日の(つまり神戸女学院の誕生日の) 三日前ということになる。

附 録

最後に、横川四十八教授の面影を伝える一文を再録する。専門部の教えずで心理学者の實生すぎ姉が同窓会誌「めぐみ」に寄せた追悼文である。なお、本文転載にあたっては、平仮名のおどり字を書き改めたほかは、全て原文のままを旨とした。

先生はほんとうの學者でありました。然も獨學でいろいろの學問を深く究められました、そして私共のよき先生であつたばかりでなく日本の堂々たる學者教授博士等と肩をならべて歩み、女學院の心理學を創設し日本心理學會に存在をみとめました。正規の學校教育は僅かに師範學校を卒へられたに過ぎませんでしたから、今日の置位にまで達せられるには如何に努力せられたかは想像にあまりありません。殊に先生はお目が悪かつたので讀書が大へん不自由でありました。失明に近い程悪かつた年が四五年も續きましたから其間の苦心と努力とは血のにじみ出る程でありましたでせう。それに次から次へと新刊書を求められて熟讀し「書物さへ讀んで居れば機嫌がよかつた」とは奥様から聞いたお言葉であります。あまり讀みすぎて眠れなくなり催眠劑を吞んで漸くねむりをとつた事も度々でありました。

學問の研究が先生の仕事であり趣味でもあり道樂でもありました。強ひて區別をするならば教室での講義を「仕事」、教會での説教を「趣味」、テストや實驗を「道樂」とよぶ事が出来ませう。旅行がお好きであつたやうですがわざわざ旅行だけに出かける

ことは極まれで大抵は地方で説教又は講演をなさつた序に足をのばされる程度でありました。明け暮れ讀書と研究に没頭して敢へて他をかへり見る事をなさらなかつた、實に先生の一生は眞の知識を追い求める事に終始一貫して居たやうに思ひます。側でみて居るとよくまああきて來ない事とその非凡な精力と耐久力に驚く他ありませんでした。一つの實驗を思ひつかれますとどんなに時間がかかっても黙々として複雑な裝置を組立て、いよいよ實驗に着手しても時には機械が動きません。又長時間をかけてほしいので組立てたりして又失敗すると云ふ時にでも悠々として又やりなされます。かけた時間と手間の多い割合に得る結果が少いので私などは早速馬鹿らしいといつてやめてしまひますが先生は容易にやめられません。山本通りの理科學館二階の裏側の部屋で蜘蛛の巣のやうに電線を引きまわして夕方まで一喜一憂の苦心を續けて居られた先生のお姿は今も目にみえます。

先生の専門はかなり廣い範圍に渡つて居ました。私共が大學部でお學びしたもののだけでも倫理、論理、教育、哲學、經濟學、心理學等でありました。其の後教育心理も教へられました。聖書や神學の研究は勿論のこと最近には圖書館學も講義して居られました。そんなものを何時何處で學んで來られたのだらうと不思議に思ひます。教授をやめられてからは一時寫眞術にこり古刹建築の研究もなさり地理も歴史も生理學も物理も化學も凡そ何にでも一應の勉強はなさりました。語學では英獨佛語へブライ語支那語に熱心であられました。國語漢文は申すまでもなく、ただ純文學の方面だけはあまり伺つたことはありませんでした。

先生の研究が同一種類の學問内にとどまらなかつたわけは多分先生は興味の赴くままに勉強なさつたからであります。どんな機會からでも興味を持つた事は相當徹底した處まで研究せなければ止められなかつた跡がみえます。小さな事を例にとりますれば、先生はあまり胃がよくなかつた、すると先生は消化器の生理作用を研究して障礙の性質を明かにしお藥を求める時にも化學的分析をして納得してからでないとお呑みになりませんでした。奥様が神經痛を患はれた時には又其の病理を研究して適切な藥を自ら調合し又注射はお宅で先生がして居られました。同病者にすすめる時にもお藥の化學的分子式から説明して有効なることをいつて居られました。高等學校に入學のお孫さんが數學に苦しんで居ると先生も數學書を求めて熱心に勉強せられました。本屋が新刊書をもつて來ると珍らしいものは大抵買はれました。そして讀んで獨り楽しむだけでは満足なさらず、必ず人に話しました。例へば老人心理學の書を読むと其の當座は何處に行つても其の話をなさいます。實に面白さうに興味満々として居る御様子にきき手はつりこまれて解らずながらも愉快に伺ひます。そのやうにして或は天才の心理、犯罪の心理、自殺の心理等々と面白く講義なさいました。まあどんなに深く廣く先生は研究なさつたのだらうと學生をして驚嘆せしめます。今から思ふと先生は手に入つた書物を熟讀して興味のうせぬ間に人に傳へ、幾度も話して居る間に先生のものになつてしまふ、このやうにして四五十年間知識を蓄積なさいました。先生の頭の中には實に澤山の知識と寶がつめられてあつた事でせう。其の先生も逝いて今は書齋に千五六百冊の書物が殘骸の如く積み重ねられてあります。ああ惜しみても惜しみ足らぬ先生の非凡な天稟と頭腦、後輩の一人として私は自分の小ささにただ恥ぢ入るのみであります。

(實生すぎ「學者としての横川先生」「めぐみ」三八号、昭和十六年十月発行、三頁。)